令和元年度　福井型コミュニティ・スクール　実施報告書

高浜町立和田小学校

１　「家庭・地域・学校協議会」の運営について

（１）「家庭･地域･学校協議会」の構成

地域
- 公民館長
- 地区委員長
- 地区委員会事務局長
- 老人クラブ代表
- 文化推進協議会代表
- 民生・児童委員代表
- スポーツ協会代表
- 和田保育所長

（８名）

家庭
- ＰＴＡ会長
- ＰＴＡ副会長　（２名）

学校
- 校　　長
- 教　　頭
- 教務主任　（３名）

地域コーディネーター（２名）
- 和田公民館長
- 和田地区老人クラブ会長

（２）協議会の内容

① 開催回数　３回

② 開催日程
- 第１回　６月１１日（火）
- 第２回　１２月１０日（火）
- 第３回　２月１４日（金）

③ 協議内容

○学校運営
- ・学校経営方針と学校の取組
- ・本校児童の学力の実態と学力向上対策

○スクールボランティアについての取組
- ・見守り隊の活動内容
- ・老人クラブとスクールボランティアの活動内容
- ・ボランティアの活動状況と児童の様子

○家庭、地域、学校の連携協力
- ・児童の生活実態の現状と課題
- ・コミュニティ新聞の発行
- ・保育所、中学校との連携

○学校評価
- ・自己評価の公表と今後の対策

○地域との交流
- ・児童の体験学習の支援

（３）協議会における成果と課題

・本校は、年間延べ１５００人以上のボランティアの方が協力してくださる地域密着型の学校である。そのため、地域の方との学習が数多く教育課程に組み込んである。地域の方の協力により、体験活動や行事参加を通して、児童の自己肯定感が高められた反面、時間の確保が難しい。そこで、本会議において、行事の精選について話し合った。行事の目的、ねらいを明確にして取り組むこと、それに合わせて、家庭・地域が協力体制を組んでいくこと等の共通理解が図れた。

・今までは、本会議を夜に行っていたのだが、第３回の協議会から、皆さんが参加しやすい昼間に開催するようにした。

２　地域と進める体験活動

（１）活動のねらい

○自分たちが住む和田地区の「人・もの・こと」と積極的に関わり、ふるさとのよさを再発見し、ふるさとに誇りや愛着が持てるようにする。

○ふるさとを見つめることで自ら課題を見つけ、その課題を解決するために主体的に判断し行動することで、地域づくりに積極的に参画しようとする意欲・関心を高める。

（２）活動の実際

①地域を知ろう！

＜片間川の学習＞（３年生）９月

水土里ネットふくいの方とともに、地域を流れる川（片間川）の生き物の観察を行った。片間川には多くの生き物が生息しており、地域の豊かな環境に目を向け、「ふるさとの豊かな自然を守るためにできることは何か」について考える学習を進めた。

②地域と関わろう！

＜高齢者との交流＞（４年生）６月～２月

地域にある特別老人ホーム「けいあいの里」で暮らしている方との交流の仕方を考え、実際に３回の交流活動を行った。演し物を準備したり、歌やクイズ、ゲームなどを一緒に楽しんだりと回を重ねることに交流が深まっていった。

③地域の人から学ぼう！

＜米づくり＞（５年生）５月～２月

地域の営農組合の方に協力を得て、田植え、かかしづくり、稲刈り、脱穀、精米等を体験した。収穫したわらや餅米を活用し、老人クラブの方としめ縄づくりや餅つきを行った。また、特別支援学級の児童たちは、ぼた餅を手作りし、営農組合の方や老人クラブの方に配付

＜楽器を学ぼう＞（３・５年）２月

和田地区在住の方に学校に来ていただき、児童がふだんあまり目にすることのない楽器の音色を聴いたり、演奏したりする機会を持った。３年生は、プロのチェロ奏者の方とリコーダーやピアニカの合奏を行った。また、５年生は、ゲストティーチャーの方が琴を複数持ってきてくださり、児童が実際に演奏することができた。本物の楽器や音にふれることにより、音楽への興味関心も深まった。

④和田の魅力を再発見！

＜和田 de 路地祭への参加＞（６年生）７月～３月

９月に地区のイベントとして行われる「和田 de 路地祭」の参加に向け、地域の方や福井大学の学生とアドバイスを受けながら準備を進めた。当日は、「射的」「サンドアート」「ボールゲーム」「プラ板＆スライム」「ザリガニつり」「いやしカフェ」「和田のいいところ探し」の７つのブースを設け、訪れた観光客に自分たちが考えた活動の企画・運営を行った。どの企画も大盛況であった。「地域の一員として、地域に貢献する」という貴重な体験となった。

（３）地域コーディネーターの活動概要

○地域の方をゲストティーチャーとして招く場合の連絡、日程調整などを行っていただいた。（３・５・６年生）

○「和田 de 路地祭」の実行委員でもあるため、企画・運営のアドバイスや調整役、福井大学の学生の紹介などでお世話になった。（６年生）

○自らゲストティーチャーとなり、活動内容のアイデアを紹介していただいた。（６年生）

○高齢者との交流で、どのような活動を考えたらよいのか、アドバイスしてくださった。（４年生）

○児童の活動の様子を参観していただき、感想やご意見・ご助言をいただいた。（４～６年）

（４）特に工夫した事項

・体験活動のみにとどまるのではなく、体験したことから課題を見つけ、自分たちに何ができるのかを考えさせるような学習活動の展開を意識して取り組んだ。

・活動後の「振り返り」の時間を大切にし、省察するのみにとどまらず、新しい課題を見つけたり、活動の修正を図ったりできるように配慮した。

・営農組合、老人クラブ、保健センター、観光組合、地域ボランティア等、地域の人材を活用し、学習の意図を理解していただきながら連携して学習を進めた。

（５）成果と課題

本校は、年間の地域ボランティア来校者数が延べ１５００人以上を誇り、学校と地域が深い結びつきを持っている。協力的な地域ボランティア活動は伝統的に行われていて、学校にとって大変有り難いことである反面、体験そのものが目的となってしまい、学校や児童の主体性という点が欠けていたと思われる。本事業が２年目を迎え、自分たちが住む和田地区の「人・もの・こと」と積極的に関わる活動を通して、ふるさとのよさを再発見し、ふるさとに誇りや愛着が持つ児童が増えただけではなく、主体的に地域と関わろうとする児童がさらに増えてきている。

２月に実施した町のアンケートでは、６年生１８名中１６名が、将来自分たちが生まれたこの土地に帰りたいと答えている。ただ単に体験活動のみを行うのではなく、地域のために自分たちに何ができるかを企画・実行したことで、地域づくりに積極的に参画しようとする意欲・関心を高められたのではないだろうか。

しかし、一方で、児童が主体的に活動するためには、多くの時間が必要である。また、ボランティアやゲストティーチャーとして来ていただいた地域の方との目標のすり合わせもまだまだ不十分である。活動時間の確保、加えて学校と地域の想いを共有しベクトルを等しくしていくことが今後の課題である。